

5. 島原半島が一体となった取り組み

(1) 取り組み開始に向けた準備

1) 島原半島地域における調査協力依頼・ヒアリング等

2010年9月15日(水) 10:00~17:00

訪問先: 南島原市、島原市、島原半島観光連盟・島原半島ジオパーク推進連絡協議会

参加者: 雲仙事務所/加藤自然保護官、プレック/松井部長・栃原氏、メッツ/枝松

① 南島原市(企画振興部商工観光課)

■ 論所原エコパーク(キャンプ場)

- ・ 南島原市は8町村が合併。当施設は旧北有馬町が管理していたものを、事情が分からないまま引き継いだ。H21から観光セクションで管理を預かっている(農林、環境でなく)。
- ・ 当初はよくわからなかったが、来訪者はそれなりに多く子ども連れで来る人達は楽しんでおり、山歩きや農業体験などもっとやってほしいとの要望がある。
- ・ BDF化の施設などもあり。
- ・ 施設整備で制約があり、相談したい。→今は13条対応、公園計画を変更して園地事業にした方が、自由度が高まる。

■ 南島原市の成り立ち

- ・ 南の加津佐、口之津、南有馬、北有馬と北の深江、布津、有家、西有家とでは地域性が違う。例えば南は小浜・雲仙回りで長崎へ、北は島原経由になる。

■ ジオパーク

- ・ ジオパークは概念が難しく、伝えにくい。住民は未だピンと来ていない。
- ・ ジオサイト・クリーン作戦は大勢が参加できてよかった。生活すべてがジオというのが本来のあり方だろう。
- ・ どこまでも行政主導ではいけない。住んでいる人自身の環境づくり、きれいにする気持ちが高まっていくことがだいじ。
- ・ 観光担当としては、地域外の人々に楽しんでもらい、地域活性化につなげるのがねらい。

■ 雲仙との関係、半島内連携の可能性

- ・ 半島の人にとって雲仙がとっつきにくい場所というのは当たっている。いい時代を経験しており、今も大型施設で誘客、というのは、農林漁業体験して「民泊」という当方の観光パターンとは考え方が異なる。
- ・ 仁田峠の道路が無料化して人は増えているはずだが、温泉街の客が増えていないのは何故か、考える必要がある。
- ・ 雲仙は四季があって、何もしないでも人が来る場所。知名度が高いのに、仕掛けができていない。こちらも組みにくいところがあった。
- ・ 過疎化が進むなど、「上」と「下」で共通する要素はある。これからは一緒にやっついていかないと地域間競争に勝てない。当方にとっても旗印として、雲仙はありがたい。雲仙は誰もが知っている。まず雲仙に来てもらって、下にも下ろす、という考え方をとりたい。
- ・ 民泊は規制がないのでやりやすい。雲仙市でも考えている人は多いが、しかし動けない。
- ・ 南島原でも多様なメニューができてきた。上と下では客のニーズが違うのだから、受け入れ側は喧嘩するのではなく組むべき。それに気づいてもらう必要がある。
- ・ 有機農業→食の安全→環境保全とつながり、クリーン作戦ともつながる。山、川、海がつなが

っていることも重視したい。

- ・南島原のロータリークラブも「ジオ」に関心を持っており、クリーン作戦等に協力意向あり。ロータリーが動けばライオンズも動く。

■団体、人材等

- ・出てくる人は決まってくる。周りのことを考えないで自己主張が強い人もいるので要注意。
- ・ガイドの会：南側の旧4町で盛ん。
- ・史談会は全市にあるがとくに北側で盛ん。
- ・有家では「蔵めぐり」を年3回実施。酒蔵2、味噌蔵2、そーめん蔵が1つある。2月には蔵開きでにぎわう。
- ・ジオ関係では神主（ジャー）さんも活躍（龍石海岸）。海岸付近で資源消滅が危惧されるところもあって心配だが、民地で手をつけられない。→関係者が集まれば保護のための知恵が出てくる可能性もある。
- ・観光協会はいろいろな業種が加入し地域バランスも考えてあるので、ヒアリング対象としては、まずはその会員がよいのではないか。
- ・数段階に分かれるかもしれないが、情報提供は惜しまない。

■観光の現状と仕組みづくり

- ・来訪者は福岡、大分方面からのバス利用客が多い。泊まりの半分は雲仙。
- ・エージェントに言わせると、南島原は荒らされていない良さがある。イルカ、フルーツ（梨など）狩りなど。口之津の資料館の解説は評判が良い。
- ・ジオの日（8月22日）にいっせいにクリーン作戦というのも良いのではないか。ウォーキングなども併せてやる。JTBなども乗る可能性が高い。海岸清掃は漁協が事業を持っているので一緒にやって「ジオ」をかぶせるとよい。
- ・論所原エコパークのエリアで間伐体験をし、ツリーハウスや植林もするというのもありか。危険なことが面白く喜ばれる。きちんと教えることが重要だが。
- ・その近所に、有機農業をやり、食の安心・安全がらみで農業体験などにも関心のあるキーマン（観光協会副会長・近藤氏）がいる。
- ・体験はいろいろなところで出来る。雲仙、島原半島を結ぶストーリーを作って興味を持たせること、「はったり」がだいじ。
- ・雲仙プラン100「魅力探し」の対象については一緒に検討してもよい。

② 島原市（まちづくり基盤整備部まちづくり管理グループ／産業振興部観光・ジオパークグループ）

■市の組織

- ・まちづくり管理グループ（「グループ」は課に相当）が当プロジェクトの窓口になったが、当該課は都市計画担当で、景観区域設定（武家屋敷）、緑のマスタープランなどが若干関係。焼山園地やネイチャーセンターなどの公園管理は都市公園とともに所管しているが、国立公園は基本は都市計画区域外で、保全対象との認識。
- ・産業振興部に「農林水産」「観光・ジオパーク」「産業政策」の各課（グループ）があって今回の業務はそちらが担当する方がよいと思う。
- ・資料提供は対応するが、その後のことは庁内で調整する。
- ・湧水関係は環境課が担当している。

■島原市の位置、観光への取組

- ・市の基本スタンスは、H21年度にできた「市勢振興計画」にすべて書かれている。今の市長の思いが表れている。
- ・島原半島の交通拠点としての役割を果たすべきだが、今はつながりが途切れている。初代市長は島原鉄道の社長だった。
- ・ジオパークはこれから、ということ。

■活動団体等

- ・ 市民参加型と言われても、国立公園雲仙について発言する人は個人的にはいるだろうが、組織としては思い当たるものがない。やはり観光やジオパーク関係になるのだろう。
- ・ 武家屋敷の街並み保全については地元研究会がある。狭い範囲だが時間をかけて地元協力を取り付け、景観保全区域を設定したが、それでひと段落している。
- ・ 噴火災害からの復興のためにいくつかの商店街で設立した「まちづくり推進協議会」には湧水を活かした街づくり研究会がある。この夏、法政大学の研究室と共同で調査した。
- ・ 特産品づくりは旧島原漁協が取り組んでいる。
- ・ 眉山トンネル工事でマツが枯れたとの投書があったが、マツクイムシが原因ではないか。環境省が対応する可能性はあるか。→林野庁が対応。

③ 島原半島観光連盟（事務局）、島原半島ジオパーク推進連絡協議会（事務局）

■雲仙温泉街との関係

- ・ （準備委員会で基本方針を固めそのあと半島全域に拡大した本委員会でプラン検討の予定、という説明に対し）まずは温泉街の当事者が汗を流すべき。それがわかれば「下」の人達もやる気になる。そこから広げていくという手順は了解。
- ・ これまでの流れだと、どうしてもコンサルだのみになりがち。
- ・ 当プロジェクトで「カフェ」に調査担当者が常駐して、地元のアイデアをまとめたり、観光客が求めるものをきちんと把握したりするのは非常によい。

■当プロジェクトとは別の動き

- ・ 国土交通省事業で「半島地域づくり会議」立ち上げの動きがある。似たような事業なので、参加する方としては一緒にやってほしいところだ。同じような会議に何度も引っ張り出されるのは活動団体の人達もたいへん。
- ・ 設立を目指す「半島地域づくり会議」は自治体を中心だが地域のキーマンも参加。それに向けて修学旅行向け体験プログラムづくりなどのワークショップでネットワークづくりを行い、立上げの会議（年度内）で成果を発表することになっている。
- ・ コンサルは東京のR P I。これまで岩崎尚子さんという人が3回顔を出している。まだ予備調査の段階でスタートしているとはいえない。
- ・ 国の半島振興の受け皿を作りたいということかもしれない。
- ・ 今回の事業に手を挙げた半島側の受け皿は、雲仙市。窓口は企画のセクション＝まちづくり振興課（観光も所管）。他の2市は、今のところ積極的に動く気配はない。
- ・ 環境省が問題なければ、一緒に作業をやって、相互に成果を利用し合うことが望ましい。一度関係者が同じテーブルに着いて話し合うことが望ましい。
- ・ ほかに「ランドブレイン」がコンサルで携わる「活力ある漁村づくり」事業（水産庁）にも島原半島観光連盟として協力を求められているが、こちらは漁業体験プログラムづくりが中心であり、島原半島南部漁協とやってもらって、成果がもらえればよいと考えている。

■地域連携と島原半島ジオパークの動き

- ・ 何事につけ半島内の連携は始まったばかりとあってよい。島原半島観光連盟独自の取組はほとんどなく、あるのは体験プログラムの運営、誘客データの蓄積くらい。災害復興を目指してできた「がまだすネット」もそれ程力を持っているわけではない。
- ・ ジオパークでは、10年を計画期間とする基本計画がもうすぐ出来上がるころ。それは今の段階で資料提供できる。
- ・ ジオパーク指定地は4年後に再審査があり、島原半島の場合、加えて2年後に国際会議も開催することになっているので、やるべきことが多い。再審査では、指定時の指摘事項がどう改善されたかや、どう地域貢献したかなどがチェックされる。
- ・ ジオパーク指定による効果など数字的に見えている部分は、今のところまだない。
- ・ ジオパークは概念がまだ浸透していない。世界的にみると中国に指定地が多いが、囲い込みタ

- イブ。ヨーロッパ型はオープン。ここでは日本型を模索したい。
- ・ 施設整備は標識・案内板程度。ガイド養成はかなり力を入れてきたが、講座では、自分の勉強のためだけに来る人も結構いる。
 - ・ これまでは行政主導だったが、持続可能なものとするためには民間による運営としていく必要がある。観光と組み合わせて何らかの手数料が落ちるような仕組みが必要。
 - ・ 地元では足元のことを知りたいと熱心な人も多いが、ジオパークそれ自体が一般の人には知られていない（羽田でのアンケートの結果）。
 - ・ 歩いて回る仕組みづくりを検討中。ルート設定はしているが、整備が追い付いていない。
 - ・ 登山道や自然道をつないでいくのが近道であり、国立公園との連携は重視している。簡易な補修、パトロールなどは公園事業に期待。とくに島原から雲仙への歩道が噴火のため今は使えなくなっている。ネイチャーセンターや田代原は拠点として重要な位置にある。
 - ・ これまでの公園施設は動物・植物が中心で、地球科学に関するものが少ない。ジオとしての使い方を出示してもらいたい。地獄の利用のあり方ももう一工夫あれば、半島地域の側からジオを通して雲仙とつながる可能性がある。
- キーマンの紹介、資料提供等
- ・ 大勢いるが、どこまでの範囲とするか。加入している組織、例えば島原半島観光連盟加入組織に限るとやりやすい。
 - ・ →できるだけ多くの人を挙げてもらった方がありがたい。
 - ・ 報告書類やパンフ等でリスト（雲仙関係が中心）に挙がっていないものはかなりある。提供は可能。
 - ・ →相良、杉本良氏にはキーマンとして参加していただきたい。

2) 半島地域との連携、半島地域づくり会議に関するR P I との協議

日 時：2010年10月28日（木）10：30～12：30

場 所：雲仙カフェ

出席者：加藤自然保護官、R P I：岩崎・佐藤、メッツ：枝松・古屋

■あるもの探しについて

- ・地元学から出発して、子ども達の学習やインバウンド観光のコースづくりにつなげていくそのプロセスをモデル化することが、今回の半島地域づくり会議の一つのアウトプットになり得るのではないか。
- ・今回「コースづくり」が目立ったが、一番のねらいは、そこを歩いて目に付いたあらゆるものやことを拾い上げて、議論してみること。その際に外の人々の目が重要で、地元の人が見慣れていたものに対して違う視点を提供し、地元の人々がその価値に気付くということがポイント。
- ・今回のプロジェクトでは、半島内でお互いに風の人、土の人になって訪ね合う、という点が面白い。まずは雲仙でやって、次はこちらからおじゃまする、という形。

■島原半島の地域事情

- ・島原半島は合併してやっと5年。半島として外に売り出すには、まずは資源さがしと地域自身による見直しや気付きが重要、それによって守り活用するスタンスをはっきりさせ、持続可能性を高めていくことが求められている。
- ・半島WSでは島原市の青年会などから、まずは地元のことを知り、資源の見直しをしたいという声は出ており、「あるもの探し」が受け入れられる可能性は高い。
- ・半島内の地域どうしがお互いのことを知らない、という意味でも交流できることは大きい。
- ・ただし地域リーダーにもいろいろなレベルがあり、誰と組むかは神経を使う必要がある。

■半島会議の組み立て

- ・2月中旬に、全国の半島地域から地域リーダーが集まる「半島地域づくり会議」を開催予定。
- ・過去の例では、1日目に体験プログラムなどのフィールドワークをやり、振り返りのグループワークをやって、2日目は全体会議。前日の報告、他地域からの事例報告、専門家を交えたパネルディスカッション、という流れ。
- ・フィールドワークの隠れたねらいは、これからやることの試行で、インナーの主体形成とそのためのプラットフォームづくりのきっかけとすること。
- ・例年1日目60人、2日目150人くらいが集まる。本来は地域リーダーが主体になってほしいのだが、行政との間でねじれが生じがち。

■島原半島地域づくりのテーマ

- ・半島づくりのプロジェクトでジオパークをテーマにした理由は、3市が乗りやすいことと継続するための受け皿があること。
- ・ジオは味付け、入口と考える。そこからいろいろな説明ができ、全体をつなげることが可能。
- ・地域の根っこにあるものは何か、そこを探り当てて「物語」を共有することを目指したい。マグマよりもっと下にあるもの。
- ・歴史が不連続、各地域に共通するものが見つけにくい。
- ・それなら過去と切り離して全く新しい目標、理想像を議論することもありか、とも考えている。
- ・そのためにもやはり地域の再認識がベースになる。それを今やっているところではないか。「半島が持つ多様性」を確認する、ということが重要と考えている。
- ・半島内は均一でなく、さまざまな豊かさがあるのは全国の半島地域に共通する特性。海に開かれ、陸への入り口であり、まずそこから外のものが入ってきたということがリッチさのもとになっている。
- ・多様性を相互に確認することはだいじだが、一方で自分のところのことだけを考えがち、という習性もある。
- ・だからこそ「あるもの探し」をお互いにやり合うことに価値がある。それがプラットフォームの

役割だろう。

- ・連携して何かをする場合、目に見える形でリターンが確実にあることが重要。総論賛成でもそれぞれが重い課題を抱えているので、それがないと現実には動けない。
- ・イベントプログラム（南島原）と宿泊提供（雲仙）、観光客への食の提供における地産地消など、可能性はたくさんありそう。
- ・情報交換と中間組織が重要。雲仙に即していうと、シャワー効果で半島内各地に人を送り込むには情報が決定的に重要だが、それが今は分からない。また、ホテル旅館組合の別組織である共同仕入れの組合を使って地産地消を進めればよいのだが、それも十分機能していない。

■事業のメニュー、業務の重ね合わせ

- ・なかなか踏み出せないとする、ちょっとだけ試してみる機会をつくるのが重要ではないか。例えば、各ホテル・旅館で1部屋だけ地産地消プログラムを作って売ってみる、というのを考えたい。リスク負担は少なく済むし新しい試みとしてPR効果が期待でき、全体としてトクになる。
- ・大賛成。それをバイヤー向けやエージェント向けのツアーとして試行する、というのもよいのでは。雲仙全体で1部屋ずつやるというのも面白い。
- ・半島会議の宿泊を雲仙で受け入れ、その際に地産地消プランのお試しをやるのはどうか。それを半島地域づくりのプロジェクトとし、農家やホテルの料理長を巻き込んで進めていく。
- ・馬場氏（スローフードの会議でイタリアに出張中）のネットワークや生活改善グループと手を組むことも考えられる。
- ・雲仙プラン100の勉強会を組み合わせ、真板さんに滋賀県高島でやった食のフェノロジーづくりを紹介してもらって運動のきっかけとするのもよいのでは。
- ・有明海のクルマエビの旬は10月いっぱいとの話し（島原の飲み屋）、ジャガイモの味にうるさい人達が多いとの話し（諫早）。ききジャガ大会、ジャガイモソムリエの話もある。
- ・会議の日に雲仙プラン100の事業として半島地域「あるもの探し」の1回目をやり、そのあと順繰りに各地域を訪ねていくのもよい。
- ・あるもの探しとバスのネットワークづくりを絡めることはできないか。島鉄をクローズアップしたい。
- ・ジオと乗り合いバスとの組み合わせは試みられているが、島鉄は観光には乗り気でないのが現状。
- ・雲仙地域「あるもの探し」の成果を踏まえ、当日に半島の人達の協力を得て「魅力づくりイベント」を行うのもありか。例えば、絹笠山の眺望確保の課題指摘を受けて、木の伐採を皆でやり、済んだら成果を確認しながら温泉を楽しむ、など。
- ・そのため、次回の雲仙プラン100WGでは、あるもの探しのアウトプットとして何を出すかを議論し、共有することが必要だろう。旅行商品づくりでなくてもまちづくりにつながればよい。磨けば良くなるものや場所をはっきりさせて、「魅力づくりイベント」のネタともしていく。

■委員会とスケジュール調整

- ・雲仙プラン100の委員会は第1回を12月末に予定。このあと島原半島に出ていく形になる。ここで「基本方針」を固め、半島とのかかわりについて議論。
- ・この委員会に国交省半島振興室の参加はできないか。九州運輸局のネットワークでエージェントの紹介もお願いしたい。

日時：2010年12月15日13:30～15:00

場所：メッツ研究所

出席者：RPI（岩崎マネージャー、佐藤マネージャー）、メッツ（枝松、古屋、佐藤）

■雲仙プラン100

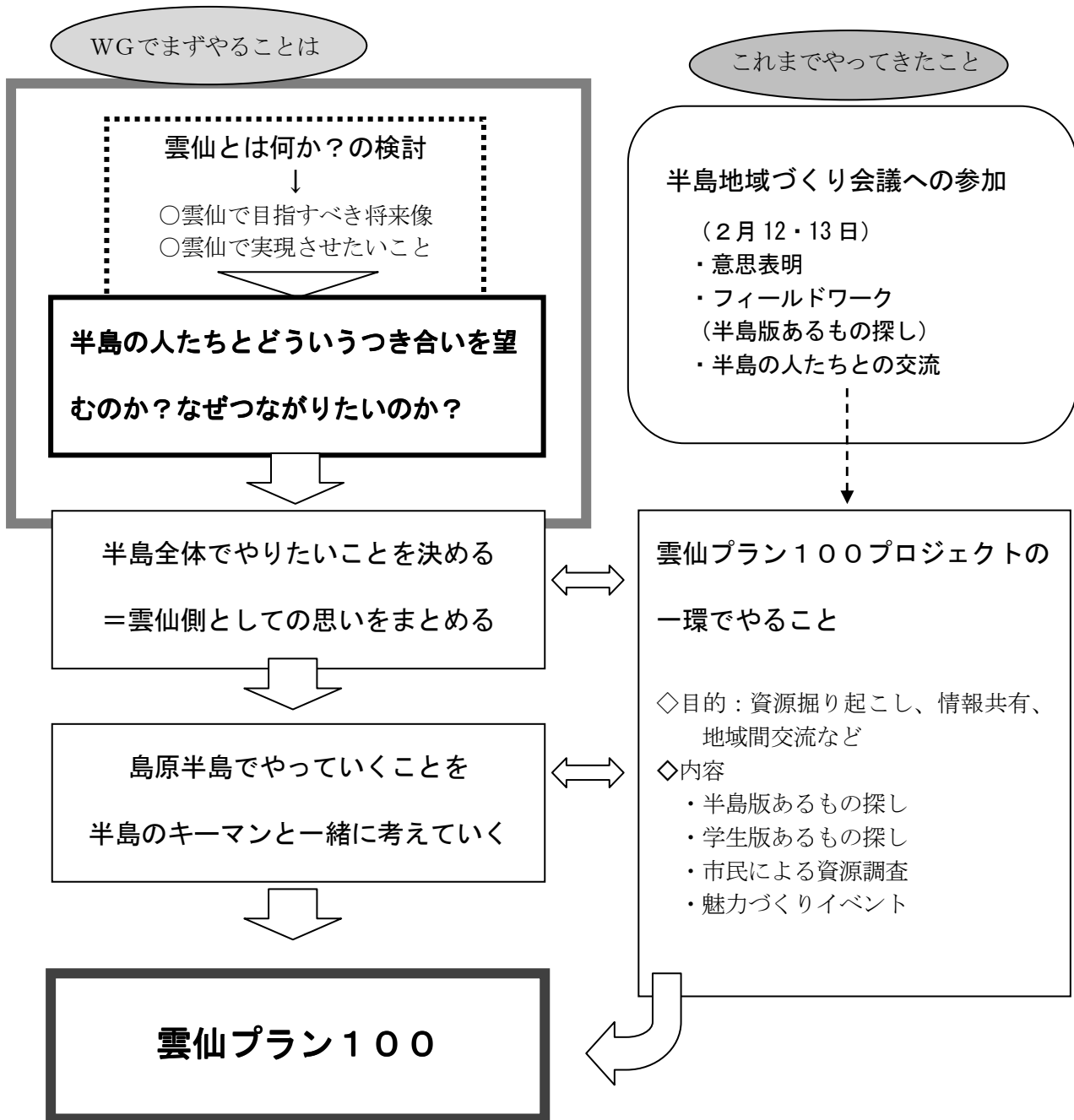
- ・半島会議でプラン100の発表機会を設けることは可能。
- ・1日目（12日）の「半島ナベ談義」で、雲仙プランを紹介いただくことは可能。
- ・2日目の「会議開催までの取り組み」に登壇いただくことも可能。雲仙でこれまでどのような議論が行われて、どのようなつながりをつくろうとしているのかを発表頂けると良い。ただしそのためにはこれまでの議論の内容を国交省半島振興室に伝えておく必要があり、1月中にプラン（または基本方針）の骨格ができていることが望ましい。
- ・また半島会議では、2月か3月に「振り返りの会」を予定しており半島での活動の継続の必要性とその受け皿について議論する予定なので、そこに雲仙プラン100で考える半島との連携プランを提案いただけると良い。
- ・いずれにしても、国交省の承諾が必要で、雲仙事業のタイアップについては先にRPIから国交省に説明する。（RPI）
- ・→骨格は、今の雲仙のWGの状況でいくと半島づくり会議の後に、本WGで決めることになるので厳しいかもしれない。基本方針案はできているようにしたいと考えている。（メッツ）
- 国交省と環境省が出席する親委員会で、半島会議における雲仙プラン100を位置づけて承認が得られるようにしたい。（メッツ）

■半島のあるもの探しについて

- ・フィールドワークでは、地域で活動している人と外の人との交流による活動の活性化にも期待している。ただ、今のプログラムは地域の資源を見せるだけ。こうしたらという思いもあるが、地元の行政及びWGの意向もあるのでなかなか難しい。（RPI）
- ・3市集まったWSでは、隣の町と一緒に取り組むだけでも盛り上がっている。お互いの考えを知れたことで新たなアイデア（商品）を生み出そうという動きもある。
- ・フィールドワークでは、地域外の活動のパートナー探しと捉えてもらってもいいのではないかな。
- ・→半島あるもの探しのひとつとしてフィールドワークを位置づける可能性を追求したい。その時には、雲仙プラン側からどのような視点（資源を柱とする地域と地域のつながり探しなど）で参加するかを明確にした上で、他地域からの参加者にも評価をお願いすることになる。後日、その結果にもとづいて雲仙プラン側で協議し、半島のあるもの探しの成果としてとりまとめる。（メッツ）
- ・「あるもの」とは何か…資源を支えている活動や暮らし／資源の他地域とのつながり／資源の新たな活用の可能性
- ・半島地域づくりのWSメンバーは、ゆっくり時間をかけて、層を厚くしていきたいと思う。
- ・本当は、住民との交流も深めていきたいが、制約もあり、活動家の交流にとどまっているが、意外と盛り上がってきている。
- ・雲仙との関わりについては、今のところあまり意識されていないので、今後コンタクトをとりながら巻き込む必要がある。
- ・なお、半島のWGメンバーは50代後半から60代。雲仙の若者のパワーと交われればと思う。島原の青年団でもほかとつながりたいという思いは強い。

3) 「半島の人たちとしたいこと」検討の進め方と基本的な考え方の整理

検討の進め方



雲仙プラン100プロジェクトの一環でやること（例）

名称	内容
島原半島版あるもの探し① 「島原半島フェノロジーカレンダーづくり」	<ul style="list-style-type: none"> ・半島全域を対象とした季節暦づくり。 ・自然（地物、動植物）、産業、食、イベントなど分野別の担当を決めてそれぞれがカレンダーを作り、合体させる。 ・食の専門家を講師に呼んで組み立てのアドバイスをいただく
島原半島版あるもの探し② 「地域限定あるもの探し」	<ul style="list-style-type: none"> ・温泉街で実施したのと同様の「あるもの探し」を半島内の特定地域で行う。 ・島原半島キーパーソンから希望を募って場所やテーマを決定。1～2箇所。 ・雲仙温泉からは「風の人」として出かけていって参加。
学生版あるもの探し	<ul style="list-style-type: none"> ・分野別テーマを設定し、それぞれにコンテストを行い、資源と思いを発掘（資源マップ・フェノロジーカレンダー作り、商品開発、郷土料理など）
市民による資源調査	<p>(例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・普賢岳の見えるスポットお薦め 100 選 ・ケータイカメラで投稿する島原半島写真コンテスト ・わが家の自慢料理募集（審査員も地元から）
魅力づくりイベント	<p>(例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「はだしであそぼう」を活用したイベント。半島の子供たちを招待、ソーメン流しイベント等とセットで実施。 ・絹笠山の通景確保のための樹林伐採と、伐採木を活用したイベント（ターザン小屋づくりなど）。 ・島原半島住民温泉感謝祭 <p>雲仙という宝を、島原半島全体の人達に大切に思ってもらえるようなイベント（島原半島住民は入浴無料など）。</p>

「島原半島ワーキンググループ」への参加依頼に当たり、以下のような考え方の整理を行った。

